

まらない。そんな中でも今日は暖かいなーと、零下三〇度である。零下二〇度も五〇度の時も着たきり雀、着替えなし。半きれの黒パンに極限状態。残酷な日々。亡くなる戦友、今朝隣の戦友も倒れる、生き残るも悲惨な運命。一步の差異がほんの偶然、今日も生きられた。

収容所の裸電球十ワットは薄暗く、時々ついたり消えたりする。

戦後六十年、死の淵から振り返り、生命の尊さと儚さ、人生のゴール終着駅に現在を考え未来を思う。

島本町役場電気室嘱託勤務
航空兵二年、シベリア収容所バイカル湖周辺三年

私のソ連抑留について

鳥取県 生田 豊

さて私の軍歴は、日野町出身で大正十五（一九二六）年生れ、丁度八十一歳でございます。十六歳で渡満開拓青少年義勇軍として満州に渡満し、三年間の訓練を終了して義勇隊開拓団に入植して一年、昭和二十年一月チチハル市の在満日本人小学校において一年繰り上げの徴兵検査を受けて甲種合格となり、二十年五月十六日ソ満国境に近いハイラル関東軍五五八部隊に現役初年兵として入隊しました。

入隊して三カ月の八月九日朝八時ごろ、ハイラル爆撃というソ連参戦により日ソの戦争状態に入ったわけであります。そして一週間、八月十八日早朝、部隊陣地より師団本部に派遣されていた連絡将校が白旗を掲げて部隊陣地に帰隊して日本の降伏を伝えられたのです。まさかの敗戦の報に

我々はこここの陣地で頑張っておるのにと天皇陛下の詔勅をも聞かぬ我々にとつては信じ難いものであります。

しかしいかんせんソ連兵に雨の降る中、武装解除されて陣地を降りハイラル南屯にあった林兼商会の牛馬屠殺場に一応収容されたのです。

あくる日、ハイラル地区日本軍はハイラル兵器廠に全員収容され、師団参謀原参謀のもとでソ連軍との折衝が始まり、我々の抑留としての第一歩が始まったのです。ソ連軍の監督下に入り関東軍が日ソ戦を想定して蓄えていたハイラル貨物廠の物資を鉄道の規格訂正、速やかにして貨物列車を連行して我々を貨車への積込作業を昼夜を問わず使役したのです。

九月下旬ともなれば日本の軍隊を乗せた貨車列車を見かけるようになり、早い者は満州里やチタ經由ウラジオストックと日本帰還という甘い考えで我々は望みをつないでいたのです。しかし我々の甘い判断は思いもよらぬ方向に進んでいました。

ソ連抑留という現実でした。それに追い討ちをかけるように冬將軍の到来、きつい強制労働、生きるための食糧の不足は否応なしに我々の身の上になりかかって参りました。平素日本人の習性として、その当時は栄養とかカロリーがどうのことうではなく腹いっぱい食べて満腹感を味わう、この事によって力が出るとされていたと思うのです、そこでソ連側の言い分としては国際法で決められたカロリーによって食事を与えているのだと決め付ける、そのあたりの日本側との折衝過程において折り合いのつかない事が度々あったようでした。最後はお前達は捕虜ではないかと威圧されてしまった場面が多々あったのでした。

そのような事が一つずつ積み重なり、その上での労働条件の過酷さによって数字の上に示しているように抑留者数の六十万、そして死亡者の六万人という大きな犠牲者を出しています。まさに一割という数字であると思います。ちなみに日露戦争の時では日本軍の死者は一万人であったと言

い伝えられています。

その事からすると見逃すことのできない事実として大きくアピールすべきと思います。

戦争終結後であり、特に人道的に見ても大きな問題であると思うのは私一人でしょうか。

さて、そこで私達ハイラルの部隊も雪の降る十一月まで物資の貨車輸送に使役して千人単位の梯団に編成されて出発したのが十一月二十五日でした。迷いもなくソ連へ連行されシベリア鉄道を西へ西へとバイカル湖も通りすぎエニセイ川のほとり、シベリア鉄道で三番目くらいに大きな都市であったように思います。クラスノヤルスク橋本・エリツイン会議のあったところです。

ここにありました第三收容所に入り寒い雪の中、幕舎（テント）生活を一週間ほどしてから十一分所に五百人ほど移動しました。

最初は收容所がなくて建設中の託児所に応急の処置をして入り、平行して收容所建設をして入居しました。

私達の作業は收容所から一キロほどの市外地にある火力発電所の労働者として発電所に変わった、色々の仕事に分かれて作業したのです。

主にその中でも特技のある者はそれを生かすような仕事、特技のない者は発電に使用する石炭の貨車からの積み降ろしと昼夜三交替で働かされました。私は特技もなく、移動するまで二年間石炭との付き合いです。

ここで厳寒のシベリアの話をししましょう。私のもっとも驚きの一つです。今で言われる寒冷前線の到来であったでしょう、十日間ぐらい太陽も拝むことができない、そして世の中が何か暗くなつて、ただ霧氷におおわれキラキラと光るものが降っている。これこそ言われるダイヤモンドダスト現象ということだったと思います。一般作業は中止され、その時の外の温度は零下五〇度から六〇度であったように思います。

満州で経験したのはせいぜい四〇度でしたからその比にならない寒さです。

そのような厳寒の中、発電所をストップさせるわけにはいかない。収容所全員が石炭作業に集中させられ、その時の装備はロシア人と同じ毛皮のシューバを着用して靴はカートンキーといって、日本で言うフェルトのような物を型抜きした靴です。それに手袋は二つに分かれた大手套を装備しての作業でした。装備しただけでも重たく身動きもままならぬのに、その上の仕事です。大変であったことを思い出します。作業は三十分交替、もう寒いを通り越して痛いのです。お互い気をつけあって凍傷に注意しあったものです。

そうした作業の中で私は石炭を積んできた貨車の扉を開けるべく鉄棒を使い、使い終わって石の上の方へ投げたのです。そしたらどうでしょう、ポキンと二つに折れてしまったのです。まさか、鉄が曲るとも、二つに折れるとは思議に思っています。そこで私なりの判断は寒さが厳しく、なる折れ跡をよく見ると鋳物の様にきれいに折れています。そこで私なりの判断は寒さが厳しく、なる鉄が持つ粘りが無くなり、そのような原因で折

れたのだと思つた次第です。あとでそのような事だから彼の有名なナポレオンでもモスコを攻めてこの厳しい冬將軍に合い、退却を余儀なくされ敗北した理由が証明された事でした。それほどきつい酷寒の中でダワイ、ダワイと労働させられた事は一生忘れる事はありません。そうした中で生存できた事は若かつた事と義勇隊として四年間満州で経験してきた事が大きかつたものと思います。三年目に移動したところはロストフカの収容所でした。ここでは大切な製材所で大きな松丸太の製材をしたり、また貨車で来た松丸太を降ろしたりで作業は五カ月で次の収容所に移動しました。こんなに短期間で移動させられるとは、何かあるなど予測しているとバルナウル収容所一カ月で待望のダモイと決定しました。そのような状態でしたのでバルナウルでは軽作業で満州から接收した物品の整理でした。

気候も良い五月下旬出發して六月中旬ナホトカに到着しました。十五日間、途中一日引込線に入

って入浴してのダモイ列車の旅でした。

そのような中でナホトカに着いて見ればまだ日本からの迎えの船が来ないと溢れんばかりの人でした。それは二十三年の六月です。そこで何の巡り合わせか私達の梯団はナホトカ地区の労働大隊に編入され、一年ダモイはお預けとの事になり、ここでの作業はナホトカ港に通ずる鉄道の掘削作業でした。トロツコで埋立地に、その横を後のカラスが先になつてダモイして行くという、つらい不運の一年間でした。

沖に入港して来る月の初めには必ず病院船高砂丸を迎え、船体に赤い赤十字のマークに思いをつのらせた事でした。

その後は一日おきぐらいに一般抑留者を迎えに興安丸をはじめ迎えに入港していました。

冬の間は海の凍結のために休み、春六月ごろからのダモイが再開されて私達の望みが二十四年六月下旬報われて、その年の三船目ぐらいであったでしょう、舞鶴の港に上陸、涙の感激でした。

四年間に心身ともにまとわりつく抑留の二文字と、腹いっぱい食べたいという欲求、できる事なら鳥になつてでも空飛んで日本の父母の待つ里に帰りたい、その切実な思いに明け暮れた四年でした。しかしソ連の凍土に置き忘れたものはないか、戦後六十一年経つた今も苔むす原野に多くの戦友の眠る事を思いますときに万感胸に迫るものを禁じえません。

最後になりましたが多くの戦友の霊位に謹んでご冥福をお祈り致します。